

特集／受験機会の複数化

本特集編集に当たって

—— 東北大学・奈良 久 ——

昭和62年度の国公立大学入学試験は、受験機会の複数化、共通第1次学力試験の科目数の削減、共通第1次学力試験受験前の志望校への出願など、様々な制度の改革を伴って実施された。正直なところ、初めて経験した受験機会の複数化による第1年目の入試には、様々な多くの混乱があったことを認めざるを得ない。例えば、至上命令とも言うべき定員確保のために、各大学がどれほど苦勞したか計り知れない。

昨年6月3日から5日までの会期で、東京芸術大学において開かれた国立大学入学者選抜研究連絡協議会（入研協）の第8回大会では、このような現状に呼応して、シンポジウム「受験機会の複数化の経験を踏まえて」が開催された。これは、一昨年大会でのシンポジウム「受験機会の複数化を円滑に進めるために」を引き継いだ企画である。

このシンポジウムの司会をつとめた筆者と山梨医科大学の平野光昭教授は、シンポジウム運営の基本方針として、「複数化」に伴う混乱や問題点の討論と共に、「複数化」の理念の積極的側面も十分に論じてほしいと願った。なぜなら、この度の「複数化」は各大学の受験者や合格者の属性などに大きな変化をもたらしたが、このような変化の詳細な調査・研究とその成果こそが「複数化」に伴う混乱や問題点の解決に最も必要なものであると考えたからである。幸い、

シンポジストの先生方の賛同が得られたので、シンポジウムの席上でも参加者の御了解を頂いた上で、上記方針のもとにシンポジウムを運営させて頂いた。

入研協の編集委員会で本特集の企画が決定された際、入研協の第8回大会でシンポジウムの司会を担当した関係で、筆者がこの特集の編集のお世話をする事となった。上述のシンポジウム運営の基本方針を踏襲して編集すること、シンポジウムにおける5件の発表論文の他に、シンポジウムにおいて活発に討論された話題に関する論文も加えること、などが編集委員会で承認されて、結局このような形の特集が出来上がった。

「受験機会の複数化」はスタートしたばかりである。「複数化」の理念は積極的に評価されながら、同時にまた、解決すべき多くの問題を抱えているのも事実である。これらの問題の内容と、その解決のために入研協がどのような活動・努力を行っているかの一端を、本特集の各論文によって理解いただけることを心から期待したい。